

島原の乱の実態を探る

～新発見の原城攻防図から～

講師 佐賀県教育庁文化課主査 **宮武 正登** さん

平成18年5月、太良町糸岐の旧家新宮家に所蔵されていた資料の中から「下高来郡之内有馬原城繪圖」(以下「絵図」)を県立図書館の調査によって発見しました。

この「絵図」にはこれまで知られていたものにはない特徴があるため、これまで原城をはじめ多くの城郭について研究されてきた宮武正登さんにその特徴について広い見地から興味深く講演していただきました。また、発掘調査が進む原城跡の状況も紹介していただきました。

1. 「島原の乱」

「島原の乱」(1637-1638)は、世界史的にも知られている争乱で、キリシタン一揆ともいわれますが、農民だけではなく元武士らが指揮した統率のとれた一揆軍と幕府軍の戦いでした。一揆軍が立て籠もった原城(現在の南島原市)は、九州屈指の巨大な城であり、本丸には大手門等の建物が残っていた城だったことが発掘調査でわかってきました。

この原城での戦いには、124,000人を超える幕府軍が動員され、佐賀藩の鍋島勢はそのうち最多の35,000人を出し、多くの犠牲者をだしました。

2. 「絵図」の特徴について

この「絵図」には、これまで知られている原城の攻防を描いた絵図に比べて、①陣所や仕寄場等の情報量が格段に多い、②実際に現地を調査したり、戦いに参加した者でなければ描けない内容がある、という特徴があります。

・陣所は55カ所ほど描かれ、原城の正面に向かい合うように鍋島勢の布陣が詳細に描かれています。鍋島勢がこのように描かれた絵図は唯一これだけですし、陣の全体配置を知っていた佐賀藩の者が描いたのだと考えられます。また、「鍋島本陣」を中心に支藩、親類、親類同格、家老の布陣は「勝茂公御年譜」とほぼ一致しています。

・鍋島本陣の全面に「勢屯」という空間が描かれています。この空間は、九州でも肥前地方の城郭の正面入口に設けられている例が多く、地域的・時代的特徴がこの絵図には反映されていることがわかります。



講演後に「絵図」を検討する参加者

・絵図上の鍋島本陣や井楼台、鐘掛け松、石火矢等の位置は、現地の遺構や伝承地の所在地と一致しています。また、井楼の描写の様子は、近世初頭頃の他の絵図資料に描かれている同種の建物と比較しても齟齬がありません。

・幕府軍と原城の間の仕寄場には「堀仕寄」(塹壕)が正確に描かれ、二の丸の麓には間府(坑道)まで描かれています。その様子は、当時の戦闘状況を記した記録の内容とも整合しています。

・描かれた原城本丸の状況は、実際に本丸内部、しかも落城直後に幕府軍の手によって埋められる状況を見た人物でなければ知り得ない情報が含まれています。

例えば、本丸大手門周辺の発掘調査では、城の破却の一環として築かれた、通路を塞ぐための石垣が地下から発見されたのですが、その一部が描かれています。実際に破却に従事したか、その状況を見た者でなければ描けないはずです。

・ただし、この「絵図」は、原本ではなく写しだと考えられます。これは、後世の情報が付加されていることや文字の書体等から判断できますが、できるだけ原本を正確に写したようです。着色されていないので、未完成だとの解釈もできます。しかし、幕府軍を構成した特定の藩の布陣や城攻めの様子を、ここまで詳しく描いた絵図は他にはありませんし、内容の史的な価値は類例がなく極めて高いものです。

3. 「島原の乱」から考えたこと

これまでの発掘調査により、原城の攻防は戦国時代の戦いのルールからはずれた「殺戮戦」であったことが明らかになりつつあります。また、戦後、佐賀藩では藩士の戦いぶりを巡って多くの処罰者を出しています。後年、佐賀藩では「葉隠」が成立しますが、人間としての自己反省を促すような凄惨な原城の戦いを経験したことも、あるいは影響しているのではないのでしょうか。

(文責：県立図書館)

〈参考〉「くすかせ」2007年冬号(第508号)の古文書紹介(3)でも原城絵図を紹介しています。